

## 養護学校における体育と養護・訓練の関連性について

中 川 一 彦

### A study on the relationship between physical education and Yogo-Kunren in the special school for the handicapped

Kazuhiko NAKAGAWA

The purpose of this study was to find out the relationship between physical education and Yogo-Kunren that was introduced to one of the educational domain of special education in 1971.

In this study, the author investigated the aims and the contents of physical education and Yogo-Kunren in the special school by the questionnaire technique.

As the results, followings were deduced ;

- 1) Physical education and Yogo-Kunren, view point of those aims, have very close relationships that the latter's are mainly improvement of physical fitness and establishment of emotional stabilities and the former's are still more improvement of physical fitness and increasing of physical abilities having good relationships with the latter.
- 2) Main contents of Yogo-Kunren are improvement of mentally and physically adaptabilities and increasing individual basic movements, and those of physical education are increasing of physical abilities and development of sociality through games and sports. The tendency of the above brings on the former turns to present physical therapy or physical games, so it seems that the differences of those two are obscurity.
- 3) The majority of responses from the special schools were physical education and Yogo-Kunren must have good relationships, and the style of its is not all the same but the latter should have a subordinate of education and integrate to physical education for supporting the development of the handicapped children.

Key words : Physical education, Yogo-Kunren, Special school, The handicapped

#### 1. はじめに

「体育（保健体育）と養護・訓練に関する一考察」で明らかにしたように、体育と養護・訓練は、共に、身体教育を志向し、その土台の上に立って、現行の体育では、文化の学習にも力点が置かれているのである。

ところで、第2次世界大戦後、養護学校では、生きる力を与えるための模索が進み、その必要から“準ずる教育”とその欠陥を補うために必要な

知識技能を授けるために、機能訓練を中核とした体育（保健体育）が実施されるようになったのであった。

そして、1963年、精神薄弱児や肢体不自由児を主とする養護学校の体育（保健体育）は、体育（保健体育）・機能訓練となり、病弱児を主とする養護学校では、養護・体育（保健体育）となったのである。

更に、1971年、教科としての体育（保健体育）

と養護の必要性から、両者の存立を考え、特殊教育諸学校の新しい教育領域として、養護・訓練という領域を位置づけ、体育(保健体育)は体育(保健体育)として独立し、機能訓練などは、養護・訓練の中へ、内容の取り扱い方の一方法として吸収されることとなったのである。

しかし、養護学校の体育と養護・訓練は、体育の養護・訓練化とか、養護・訓練の体育化ということが言われたり、体育と養護・訓練には境界線がないなどと表現され、それぞれの独立性あるいは関連性を見失い、曖昧なものになっているようである<sup>7)</sup>。

そこで、本研究では、養護学校の体育と養護・訓練がどのように行われているか、又、それらを担当する教師は、それらの関係をどのように考えているのかを知ろうとした。

## 2. 研究方法

研究目的達成のために、体育と養護・訓練の目標と内容に関する質問、体育と養護・訓練の関連性についての教師の意識に関する質問を定め、アンケート調査を便送法で実施し、中学部の保健体育あるいは養護・訓練担当教員に、学校を代表して答えてもらった。

アンケート調査の対象数は、全国各地が網羅できるように配慮し、ランダムに、精神薄弱、肢体不自由、そして病弱の養護学校各70校ずつとした。

調査の期間は、1989年6月末日から同年8月末日までであった。

尚、アンケート調査の回収率は、精神薄弱養護学校67.1%(47校)、肢体不自由養護学校64.3%(45校)、病弱養護学校62.8%(44校)であり、これらを研究の対象とした。

## 3. 結 果

### 1) 体育の目標

「体育で重要な目標は」との質問に対し、精神薄弱養護学校では、39校からの回答(複数回答を含む)で、「体力・身体機能の改善、発達、向上」が74.4%(29校)と最も多く、次いで「運動・身体操作に関する技能の習得」33.3%(13校)であった。肢体不自由養護学校では、同様に38校からの回答で、「運動、身体操作に関する技能の習得」44.7%(17校)、「体力・身体機能の改善、発達、向上」23.7%(9校)の順であった。又、病弱養

護学校では、同様に41校からの回答で、「運動・身体操作に関する技能の習得」43.9%(18校)、「運動・健康・安全・身体・精神に関する知識の習得」31.7%(13校)、「体力・身体機能の改善、発達、向上」26.8%(11校)の順であった。(図1)

### 2) 養護・訓練の目標

「養護・訓練で重要な目標は」との質問に対し、精神薄弱養護学校では、同様に35校からの回答で、「体力・身体機能の改善、発達、向上」が57.1%(20校)と最も多く、次いで「情緒の安定、発達」51.4%(18校)であった。肢体不自由養護学校では、同様に39校からの回答で、「体力、身体機能の改善、発達、向上」56.4%(22校)、「運動・身体操作に関する技能の習得」28.2%(11校)の順であった。又、病弱養護学校では、同様に31校からの回答で、「情緒の安定、発達」64.5%(20校)、次いで「体力・身体機能の改善、発達、向上」48.4%(15校)であった。(図1)

### 3) 体育の内容と授業の内容

「指導要領の中の体育の内容で最も重要なものは」との質問に対し、精神薄弱養護学校では、39校からの回答(複数回答を含む)で、19校(48.7%)が「集団的スポーツ」、15校(38.5%)が「個人的スポーツ」、そして11校(28.2%)が「体操」だった。そして、授業の内容として、47校から、41種の運動やスポーツがあげられたが、各学年を通じ、集団行動(88.7%)、マット運動(85.1%)、長距離走(85.1%)、体操(77.7%)、短距離走(73.1%)、固定施設や器具・用具を使っての運動(72.3%)、水遊びを含む水泳(71.6%)が多く取り入れられ、障害走(56.7%)、跳び箱運動(53.9%)、そしてサッカー(53.8%)が半数以上の学校で実施されていた。

肢体不自由養護学校では、体育の内容で最も重要なものについては、36校からの回答(複数回答を含む)で、26校(72.2%)が「集団的スポーツ」であり、「格技」や「ダンス」という回答はなかった。そして、授業の内容として、39校から31種の運動やスポーツがあげられ、各学年を通じ、体操(64.1%)、集団行動(60.7%)、ゴロバレーボールや風船バレーボールを含むバレーボール(59.8%)、走・跳・投の運動(58.1%)、水遊びを含む水泳(55.5%)が多く取り入れられていたが、高

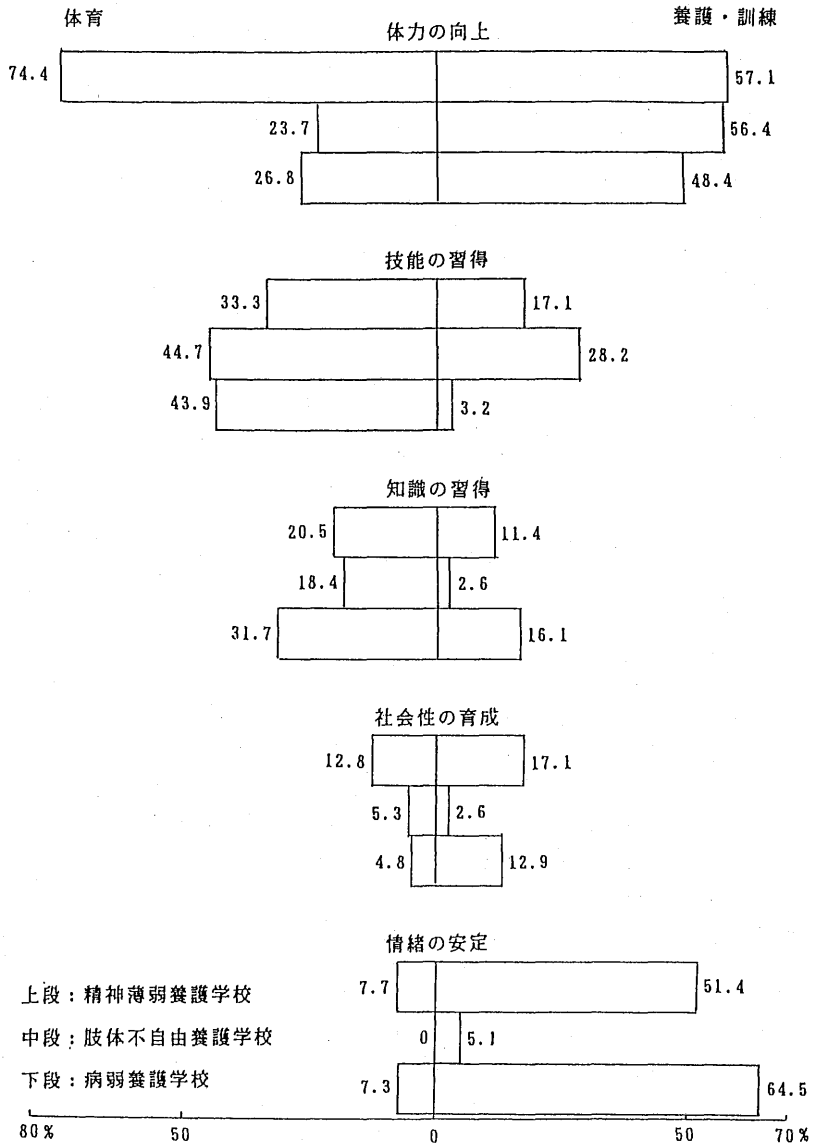


図1 体育と養護・訓練の目標 (含む複数回答)

跳び、巾跳び、そして剣道を実施している学校は見られなかった。

病弱養護学校では、体育の内容で最も重要なものについては、37校からの回答(複数回答を含む)で、32校(89.2%)が「集団的スポーツ」であった。そして、授業の内容として、41校から53種の運動やスポーツがあげられたが、各学年を通じ、ゴロバレーボールや風船バレーボールを含むバレーボールを80%以上(82.9%)の学校で取り入れ、バスケットボール(70.7%)、マット運動(65.9%)、体操(64.2%)、卓球(61.8%)、集団行動(57.7%)、サッカー(54.5%)、水遊びを含む水泳(53.7%)、バドミントン(51.2%)、そして野球を含むソフトボール(50.5%)が、多くの学校で実施されていた。(図2)

#### 4) 養護・訓練の内容と授業の内容

「養護・訓練の指導要領の内容で最も重要なものは」との質問に対し、精神薄弱養護学校では、31校からの回答(複数回答を含む)で、23校(74.2%)が「心身の適応」をあげ、12校(38.7%)が「運動機能の向上」、8校(25.8%)が「感覚機能の向上」をあげていた。そして、授業の内容については、養護・訓練を実施している28校(59.6%)が、各学年を通じ、「肢体の基本的動作の習得および改善」(64.2%)、「感覚機能の改善および向上」(63.0%)、「生活の基本動作の習得および改善」(53.1%)を内容としている学校が多く、「心身の障害や環境に基づく心理的不適応の改善」(49.4%)、「障害を克服する意欲の向上」(41.9%)、そして「認知の補助手段の活用」(40.7%)を内容としていた。

肢体不自由養護学校では、養護・訓練の内容で最も重要なものについては、同様に37校からの回答で、23校(62.2%)が「運動機能の向上」をあげ、「意志の伝達」との回答はなかった。そして、授業の内容については、養護・訓練を実施している41校(91.1%)が、各学年を通じ、「肢体の基本動作の習得および改善」(78.5%)、「生活の基本動作の習得および改善」(66.7%)、「感覚機能の改善および向上」(64.4%)で、多数を占めていた。

病弱養護学校では、養護・訓練の内容で最も重要なものについては、同様に39校からの回答で、38校(97.4%)が「心身の適応」をあげていた。そして、授業の内容については、44校全てが養護・

訓練を実施しており、各学年を通じ、「心身の障害や環境に基づく心理的不適応の改善」(97.0%)、「健康状態の回復および改善」(90.1%)、そして「障害を克服する意欲の向上」(76.5%)で絶対多数を占めていた。(図2)

#### 5) 体育と養護・訓練の関係について

体育と養護・訓練の関係について、精神薄弱養護学校では、37校からの回答(複数回答を含む)で、「体育は養護・訓練を含む」29.7%(11校)、「体育は年齢が大きく、障害が軽いほど必要性が増し、養護・訓練は年齢が小さく、障害が重いほど必要性が増す」27.0%(10校)の順であり、「体育と養護・訓練は全く同じもの」との回答は見られなかった。ちなみに、体育と養護・訓練は関連を持って行なわれるべきかどうかについては、43校の回答のうち、35校(81.4%)が「持つべき」とし、その必要性なしとする回答は見られなかった。

肢体不自由養護学校では、同様に43校からの回答で、「体育と養護・訓練の基礎は同じで、発達するほど分化していく」30.2%(13校)が最も多く、やはり、「体育と養護・訓練は全く同じもの」との回答はなかった。ちなみに、体育と養護・訓練は関連を持って行われるべきかどうかについては、44校の回答のうち、36校(81.8%)が「持つべき」としていたが、その必要性なしとする回答も1校あった。

病弱養護学校では、同様に41校からの回答で、「体育と養護・訓練は一部のみ同じ」22.0%(9校)、「養護・訓練は体育の土台でもあるし、同列でもある」19.5%(8校)、「体育と養護・訓練の基礎は同じで、発達するほど分化していく」と「体育は年齢が大きく、障害が軽いほど必要性が増し、養護・訓練は年齢が小さく、障害が重いほど必要性が増す」は、共に14.6%(6校ずつ)、「体育と養護・訓練は隣り合わせ」12.2%(5校)等、様々であったが、同様に、「体育と養護・訓練は全く同じもの」との回答はなかった。ちなみに、体育と養護・訓練は関連性を持って行われるべきかどうかについては、45校の回答のうち、33校(73.3%)が「持つべき」としていたが、その必要性なしとする回答も2校あった。(図3)

養護・訓練

体育

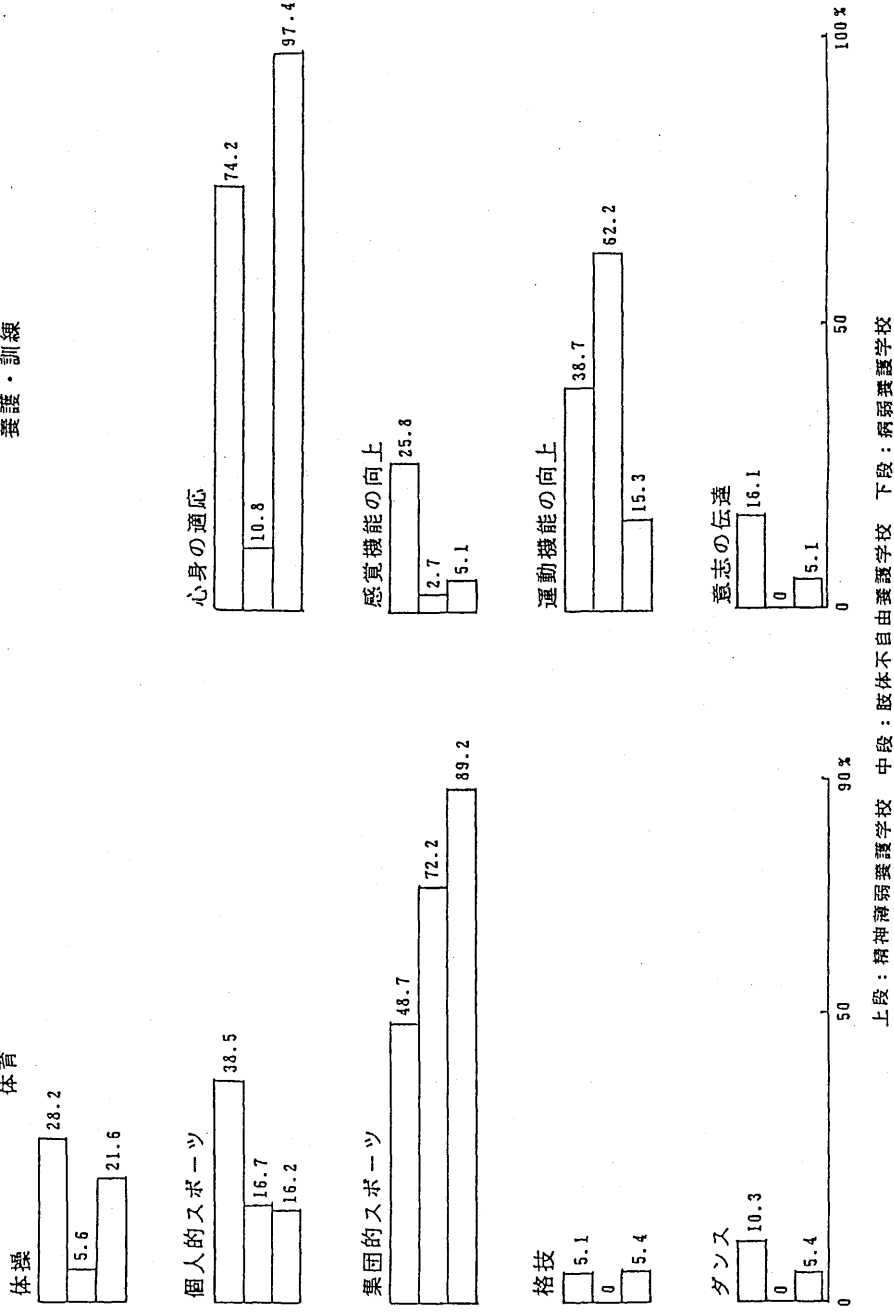


図2 体育と養護・訓練の内容 (含む複数回答)

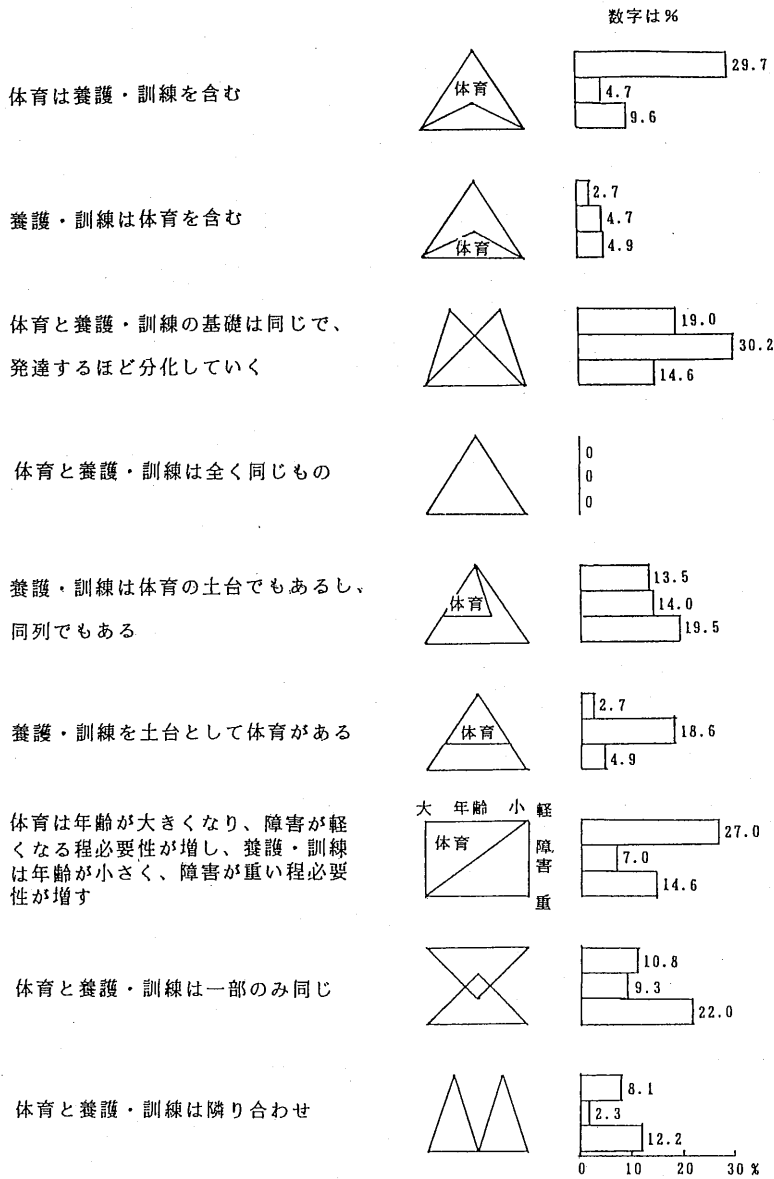


図3 体育と養護・訓練の関連性（含む複数回答）  
 上段：精神薄弱養護学校，中段：肢体不自由養護学校，  
 下段：病弱養護学校

#### 4. 考 察

##### 1) 体育の目標と内容について

養護学校の体育の目標を何におくかという問題では、心身に障害を持つ子供を対象としているという特徴を反映して、「運動・身体操作に関する技能の習得」との回答が多かったが、それでも50%を割っていた。特に目立ったものとして、精神薄弱養護学校の「体力・身体機能の改善、発達、向上」があったが、これは、他の養護学校では体力の向上があまり望めず、他と比較して突出したのであろうと考えられた反面、精神薄弱者の機能的な能力・体力の低さを何とかしなければいけないという教師の卒直な心の現われとも考えられた。

体育の内容で最も重要なものについては、「集団的スポーツ」という回答であったが、授業の内容は、精神薄弱養護学校では個人的スポーツや体操が多く、肢体不自由養護学校では体操が多かった。「集団的スポーツ」としては、集団行動や簡易な形でのボールゲームが、肢体不自由や病弱養護学校で取り入れられていた。

養護学校では、「集団的スポーツ」を大事にして、技能の習得や社会性の育成をはかれるよう学習させたいという教師の願いが、現実には、目標と関連して、生徒の障害故に、状況に即した形で行われているものと考えられた。言い換えれば、養護学校の体育は、体操や個人的スポーツ、そして簡易な形でのボールゲーム等で技能の習得や体力の向上等をはかろうとする方向へ向い、学習指導要領に書かれている「健康の増進」や「明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる」とは程遠いものようであった。

そして、このような傾向は、「準ずる教育」をしている養護学校における体育の目標の曖昧さ、ひいては、体育の養護・訓練化を示すものであり、技能の習得にこだわらない、豊かな発達を支援するための広がりを持った体育が必要であると感じられた。

##### 2) 養護・訓練の目標と内容について

養護・訓練の目標で最も大切なものとして、精神薄弱と肢体不自由養護学校では、「体力、身体機能の改善、発達、向上」をあげ、病弱養護学校でも第2位にこれをあげていた。そして病弱養護学校では、第1位に、病院生活の安定と病気に対する不安を柔げるためであろうか、「情緒の安定、発

達」を、精神薄弱養護学校では、精神の働きの安定と発達を願い、「情緒の安定、発達」が第2位であった。これらの傾向は、それぞれの養護学校の特徴を反映した結果であり、何をすることも、まず、体力の向上、そして情緒の安定が大切であるとの考えを現わしているものと考えられた。

養護・訓練の内容で重要なものについては、やはり、それぞれの養護学校の特徴を反映した結果として、精神薄弱と病弱養護学校では、「心身の適応」が、そして精神薄弱と肢体不自由養護学校では、「運動機能の向上」があげられていた。この事は、大切にしている目標に合うものであり、精神薄弱と肢体不自由養護学校の個々人の基本的動作の習得や病弱養護学校の心理的不適応の改善、障害を克服する意欲の向上を目指す授業の内容とも一致していた。

しかし、このような内容は、目標である体力の向上や情緒の安定を求めると、何をどうやったら良いかという点で曖昧となり、中身がないまま、従来の機能訓練やみんなで出来ることをやるということから、遊びやゲームを中心とした内容となりやすいのではと考えられた。そして、一方では、医療的傾向の強い体力の向上と体育的（教育的）な技能や知識の習得、そして社会性や情緒の安定と発達が求められ、体育との区別が曖昧になる傾向が見られているのではないかと考えられた。

##### 3) 体育と養護・訓練の関連性について

体育と養護・訓練の目標や内容から検討して見ると、目標から見れば、養護・訓練の体力の向上や情緒の安定を受けた形で、体育では、更に体力の向上、そして技能の習得等を目指したいとする相互に含んだり含まれたりという関係が見られた。内容的にも、養護・訓練では、「心身の適応」や「運動機能の向上」をはかりながら、精神薄弱と肢体不自由養護学校では、個々人の基本動作の習得を中心にし、体育では、体操や個人的スポーツが多く実施されていた。又、病弱養護学校では、「心身の適応」をはかりながら、「集団的スポーツ」を生かす形で、心理的不適応の改善等を考慮し、体力の向上、技能や知識の習得に努めているものと考えられた。

体育と養護・訓練は関連性を持って行なわれるべきとの回答が、大多数の養護学校（全体で78.8%）から寄せられたが、その関連性については、

様々な見方が存在し、少なくとも、体育と養護・訓練は全く同じものではないが、重なり合ったり、補い合ったりする関係にあるものであるとの見解の一致は得られたようである。そして、その多くは、養護・訓練は、教育の下部構造を担いながら、その一般性と特殊性という二面を持ち、体育と有機的に統合し、障害者の発達を支援するものの一つであると考えることが出来た。

しかし、体育と養護・訓練の関係の見方が様々であるということは、後者誕生の経緯からしてもうなづけるのではあるが、それは、又、体育と養護・訓練に近い存在、似たような存在であるということでもあろう。

体育（保健体育）と養護・訓練は、養護・訓練の内容の一部である「意志の伝達」という項目を除けば、共に、第一に、身体を教育を志向していることがわかった。特に、養護・訓練は、モーターのトレーニングのための感覚・運動の中核の発達を促し、又、ポンプのすげ替えや修善といった矯正的技術を持ち、欧米で、Corrective Physical EducationあるいはDevelopmental Physical Educationと呼ばれる体育（保健体育）の一分野に近いものと考えることが出来た。そして、体育は、それらを含み、総合的に、能力に応じ、可能な限り運動能力を高め、スポーツを介し、明るく豊かに生活できるよう支援しようとするものなのである。それ故、両者は、境界線がないという関係で、互いに、協力、協同し合い、身体を介した教育として存在していると思えることが出来た。

## 5. まとめ

養護学校の体育と養護・訓練の目標や内容を調査し、両者の関連性が密であることを明らかにしてきた。

体育と養護・訓練の関連性は、目標から見れば、養護・訓練の体力の向上や情緒の安定を受けた形で、体育では、更に体力の向上、そして技能の習得等をはかるという相互に含んだり含まれたりという関係であった。

内容的には、養護・訓練では、心身の適応をはかり、個々人の基本動作の習得、体育では、「集団的スポーツ」を大事に、技能の習得や社会性の育成に努めたいとしていた。しかし、養護・訓練は、従来の機能訓練やみんなで出来ることをやるということから、遊びやゲームを中心とした体育的の内容

となり、体育は、生徒の障害故に、体操や個人的スポーツ、そして簡易な形でのボールゲーム等で技能の習得や体力の向上等をはかるという方向へ向い、両者の区別が曖昧にもなっていた。

そして、体育と養護・訓練は関連性を持つべきとの回答が大多数だったが、その関連性については、両者は全く同じものではないが、重なり合ったり、補い合ったりする関係にあり、養護・訓練は教育の下部構造を担いながら、その一般性と特殊性という二面性を持ち、体育と有機的に統合し、共に障害者の発達を支援するものの一つであると考えることが出来た。

## 参 考 文 献

1. 河添邦俊ら(1981):障害児の体育.大修館書店,東京,pp.386.
2. 文部省(1980):盲学校,聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領.慶応通信,東京,pp.190.
3. 文部省(1980):盲学校,聾学校及び養護学校高等部学習指導要領.慶応通信,東京,pp.180.
4. 村田 茂(1973):養護・訓練をめぐる.肢体不自由教育 15:4-13.
5. 中川一彦(1981):障害児の教育における体育の役割.学校教育 34(12):18-23.
6. 中川一彦(1984):特殊教育諸学校の体育・スポーツ.現代体育,スポーツ体系5,pp.124-146.
7. 中川一彦(1991):体育(保健体育)と養護・訓練の関連に関する一考察.筑波大学体育科学系紀要 14:1-8.
8. 西川公司(1991):「養護・訓練」改訂の概要.肢体不自由教育 101:4-7.
9. 大井清吉(1975):障害の重度・重複化と体育.精神薄弱児研究 201:86
10. 大川原潔ら(1982):盲学校,聾学校および養護学校における養護・訓練指導の現状と問題点についての調査研究.筑波大学学校教育部プロジェクト研究,pp.1-65.
11. 大川原潔ら(1989):盲学校,聾学校及び養護学校における養護・訓練指導に関する総合的調査研究.養護・訓練研究 2:101-174.
12. 竹村雅裕(1989):肢体不自由養護学校における「体育」と「養護・訓練」の関係についての一考察.筑波大学体育専門学群卒業論文,pp.88.
13. 和久田佳代(1987):精神薄弱児の体育指導に関する研究.筑波大学体育研究科修士論文,pp.212.
14. 全国肢体不自由養護学校長会(1978):肢体不自由養護学校における「養護・訓練」について.日本チャリティ・プレート協会,pp.39.